資料

大学生の教養教育に対する満足度及び教育効果の検討

佐藤美幸[1)]　奥田泰子[1)]　河野保子[1)]　池田　守[2)]　前田桂子[2)]　白石義孝[2)]

[1)] 宇部フロンティア大学人間健康学部　[2)] 宇部フロンティア大学人間社会学部

キーワード：　大学生，教養教育，満足度，教育効果

はじめに

我が国の大学教養教育は，1991 年の大学設置基準の大綱化以降，教養部が廃止され，各学部学科に教養教育を担当する教員が配置されることにより，それぞれの大学が目的に応じて専門教育との関連を視野に入れた 4 年間のカリキュラムを編成することが可能となった [1)]．大綱化以降の大学教育改革は，専門教育を中心とした学部教育の編成へと進み，結果として教養教育が軽視される風潮を生んだとも指摘されている[1)2)]．こうした大学改革の流れの中において，中央教育審議会（中教審）[3)]では，「グローバルの競争が展開される知識基盤社会の時代を迎え，諸外国と伍していく観点から若年人口が減少する中で，学士レベルの資質・能力を備えた人材の供給を維持・増進していくことが重要である」と述べており，教育基本法の新たな条文では，「高い教養と専門的能力を培う」(第 7 条)として大学の基本的役割及び教養教育の重要性を強調している．中教審はその答申の中において，「教養」の意味・内容を「学習成果」という観点から参考指針に示し，「教養」を身につけた市民として少なくとも行動できる能力を啓発することを位置づけている．そして，新しい時代に求められる教養教育の在り方を提示している．

U 大学は，平成 20 年 4 月に教養教育充実ワーキンググループ（教学会議の下部組織）を発足させ，本学の教養教育が新しい時代に即応できる知の基盤としての条件を満たしているか，教養教育を再構築するとすればそれはどのような形が望ましいのかを評価するとともに，教養教育が十分に機能できるような実施体制の確立を目的として活動を続けてきた．これらの解を得るためには中教審等の審議のまとめや報告，答申の検討のみならず，在学生の教養教育に対する意見を反映することも重要と考え，平成 20 年度前期の講義終了後に S 学部（F 科，J 学科），K 学部（K 学科）の学生に対して教養教育が学習成果としてどのような状況にあるのかについて実態調査を実施した．

Ⅰ．目的

本調査の目的は，教養教育科目について学生がどのような科目を履修し，それによってどのような力が身についているのか，また教養教育に対する満足度を明らかにすることにある．そして，大学の教養教育科目の在り方及びカリキュラムについて検討し，よりよい教養教育科目にしていくための資料とする．

Ⅱ．調査対象及び期間

U大学の1，2年生（S学部F学科84名及びJ学科51名，K学部K学科121名）に対して，教養教育充実ワーキンググループが作成した調査内容を配布し，回答を得た．調査は，前期授業がほぼ終了した7月中旬に実施した．

Ⅲ．調査内容

調査票は，U大学の各学科の必修および選択の教養教育科目について，①履修の状況，②受講するときの影響要因（単位が取りやすい，先輩からの情報，試験の方法などの14項目）（資料参照），③教養教育を履修したことによって身についたこと（教養的知識，表現力，情報を集める力などの21項目）（資料参照），④教養教育に対する満足度について，ワーキンググループが独自に作成したものを用いた．なお，教養教育を履修したことによって身についたことについては，中央教育審議会の「新しい時代における教養教育のあり方について」の答申（平成14年2月21日）を参考に質問項目を作成した（資料参照）．

Ⅳ．分析方法

受講するときの影響要因については，［大いに影響する（4点）・多少影響する（3点）・あまり影響しない（2点）・全く影響しない（1点）］の4段階で得点化し，

平均点を比較した．また教養教育を履修したことによる学びについては，［とても身についた（4点）・やや身についた（3点）・あまり身につかなかった（2点）・全く身につかなかった（1点）］とし同様に得点化，集計を行い，その平均値をもとに比較した．満足度も同様に，［とても満足できた（4点）・やや満足できた（3点）・あまり満足できなかった（2点）・全く満足できなかった（1点）］として評価した．

V．倫理的配慮

調査は無記名の自己記入方式とした．調査実施前に，調査の目的を説明し，調査への参加は自由であること，調査は成績に影響がないこと，統計的に処理するため個人は特定されないこと，得られた結果は教育上活用することについて，文書と口頭で説明した．調査票の記入，提出をもって調査に同意したものとした．本稿の発表に当たり，U大学倫理委員会の承認を得た．

VI．各学科の特徴

1　S学部F学科

F 学科の教育目的は「社会的存在としての人間と社会のあり方の探求を目標に，社会学の素養と人間関係・心理，環境経営，社会福祉について幅広い知識を持った上で，それぞれの分野について基礎的専門知識・技術を有し，かつ倫理性と責任感を備えた人材を育成すること」とされている．

F 学科の教養教育は，現代社会で身に付けておくべき基本的知識を習得する科目として位置づけられている．

2　S学部J学科

J 学科の教育目的は，「人間形成・人間発達の重要な段階である児童期，特に幼児期に重点をおいて，心と身体の発達のプロセスと，それに影響を及ぼす社会的要因について総合的に学ぶことを目標とし，乳幼児期から児童期における成長・発達に伴うさまざまな問題を解決できる人間性豊かな子育て専門家を育成すること」である．したがって，J学科の教養教育においても，専門領域を学ぶ上で必要なスキルはもちろん，人間性を育てるための現代社会の現状を知り，倫理観を養うこと，またさまざまな角度から社会を見ることができる能力や態度を養うための科目構成をとっている．

3　K学部K学科

K 学科の教育目的は，「生命の尊厳や基本的人権を擁護できる高い倫理観，幅広い教養，豊かな人間性並びに看護の現象・事象に対応できる高度な専門的知識・技術，判断力のある質の高い看護職者の育成」を掲げており，教養教育，専門教育を通して，生命の尊厳や基本的人権を擁護できる高い倫理観（人間観）の強調，および人間，健康，環境を主軸として看護教育における科目を構成している．一般に看護学教育における教養教育の目的は，「各学問領域の基礎的知識や理論，法則，あるいはものの見方，考え方を学ぶことにあり，教養教育によって，豊かな人間性を養うこと，人間と環境の関係，あるいは個と集団の関係について理解を深め，学生達が生きている現代社会を理解すること」とされている．そこで，K学科においても，教養教育は新しい時代を生きるための教養，特に変化の激しい社会にあって，地球規模の視野，歴史的な視点，多次元的な視点で物事を考え，未知の事態や新しい状況に的確に対応していく力の育成に力点をおいている．

VII．アンケート結果および考察

1　S学部F学科

1）対象

対象者数は84名であった．そのうち回答者数は74名で，回答率は88.1%であった．内訳は，1年生は44名中42名が回答し，回答率は95.5%，2年生は40名中32名が回答し，回答率は80.0%であり，2年生がやや回答率が低かった．

2）受講するときの影響要因（図1）

受講するときの影響要因について平均点が3点以上であった項目は，「試験の方法（3.01：平均点；以後同じ）」，「科目に興味関心がある（3.00）」であった．つづいて，「5時限目の講義（2.92）」「単位が取りやすい（2.89）」「1時限目の講義（2.88）」「空き時間ができる（2.85）」「先輩からの情報（2.85）」が挙げられた．一方，「科目名(2.30)」「教科書購入の必要性（2.60）」「教科書の有無（2.62）」「シラバスの内容（2.62）」は影響が少ない結果であった．学年間の差異が顕著だったものとして，「1時限の講義（1年2.76→2年3.03）」「5時限の講義（1年3.24→2年2.50）」「単位が取りやすい（1年2.66→2年3.19）」「科目名（1年2.49→2年2.06）」「教科書購入の必要性（1年2.44→2年2.81）」などが挙げられる．このことから，学年が進行するにつれて，学生の生活状況が変化すること，科目名よりも単位の取りやすさで授業を選ぶといった傾向が読み取れる．

3）教養教育を履修したことによって身についたこと（図2）

教養教育の履修によって身についたことについて平均点2.75以上の項目は，「教養的知識（2.85：平均点；以後同じ）」「情報を集める力（2.81）」「情報を選択する力（2.81）」「情報を活用する力（2.80）」「他者の立場に立って考える力（2.76）」であり，つづいて「表現力（2.74）」「他者とのコミュニケーション能力（

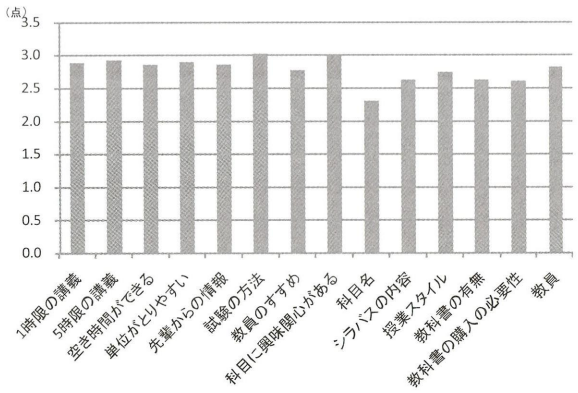

図1　選択科目を受講するときの影響要因(F学科)

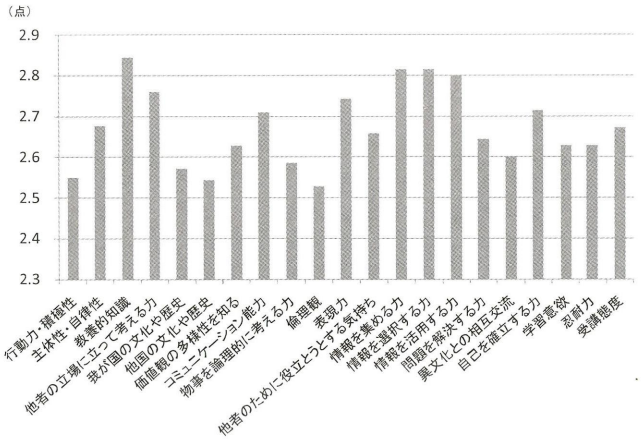

図2　教養教育を履修することで身についたこと(F学科)

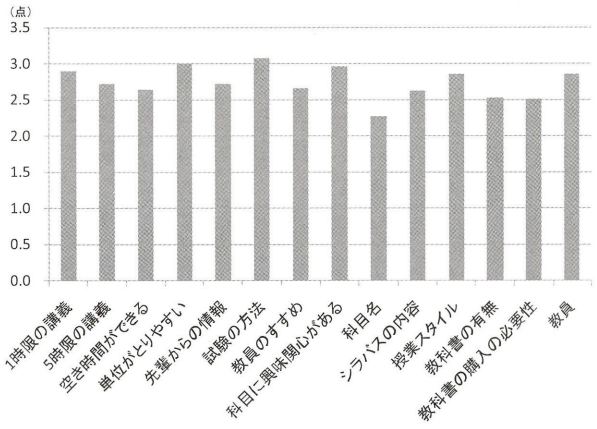

図3　選択科目を受講するときの影響(J学科)

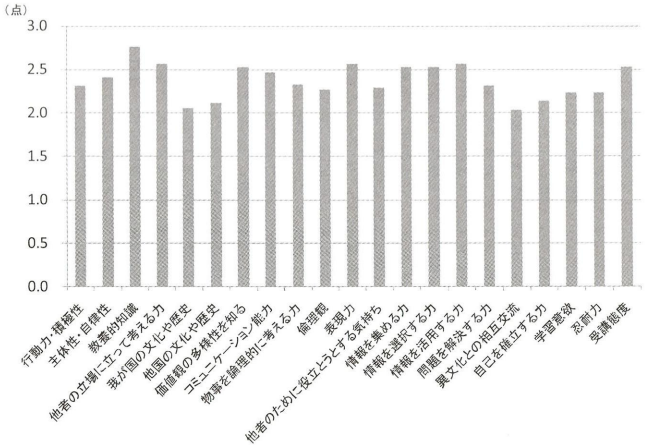

図4　教養教育を履修することで身についたこと(J学科)

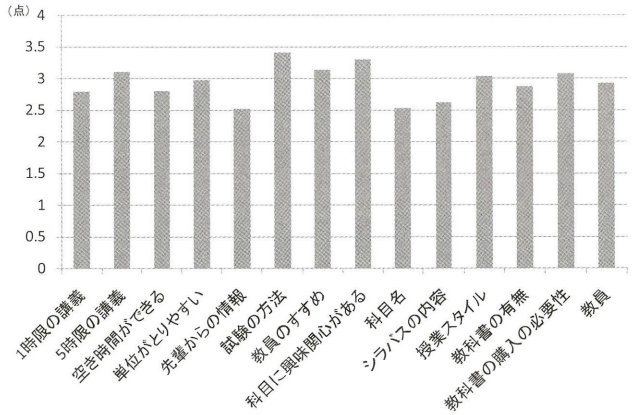

図5　選択科目を受講するときの影響要因(K学科)

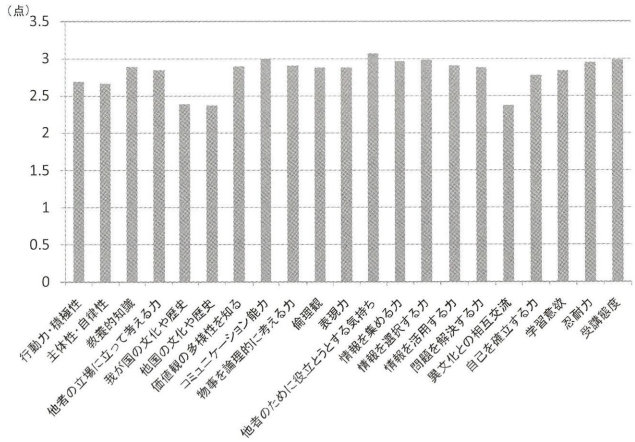

図6　教養教育を履修することで身についたこと(K学科)

2.71)」「自己を確立する力（2.71)」「主体性・自律性（2.68)」「受講態度（2.67)」が身についたと答えた学生が多かった．一方，平均点が2.50を下回る項目は見られなかったので，F学科の教養教育の目的は概ね充足されているようにみえる．

4）満足度について　（表1）

教養教育の満足度については，50名（59.6%）が「とても満足(4名)」，「やや満足(46名)」と回答していた．反面，「あまり満足していない（17名)」，「満足していない（3名)」と，満足度の低い者も27.0%存在し

表1　学生の教養教育に対する満足度

（人（%））

学科（回答数）	満足	やや満足	あまり満足でない	満足でない	平均点（点）
F学科（70）	4（5.7）	46（65.7）	17（24.3）	3（4.3）	2.75
J学科（47）	0（0）	29（61.7）	15（62）	3（6.4）	2.35
K学科（103）	9（8.7）	77（74.8）	15（14.6）	2（1.9）	2.9
全体（220）	13（5.9）	152（69.1）	47（21.4）	8（3.6）	2.67

ている．中でも２年生の満足度が低くなっていたが，基礎学力や学習意欲の向上などに，課題があるように思われる．

2．S学部J学科

1）対象

対象者数は61名であった．そのうち回答者数は51名であり，回答率は83.6%であった．内訳は，1年生は18名中15名が回答し，回答率は83.3%，2年生は43名中36名が回答し，回答率は83.7%であった．

2）受講するときの影響要因（図3）

受講するときの影響要因について平均点が3点以上であった項目は，「試験の方法（3.08：平均点；以後同じ）」，「単位がとりやすい（3.00）」であり，つづいて，「科目に興味関心がある（2.96）」「１時限の講義(2.90)」「授業スタイル（2.86）」「科目を担当する教員（2.86）」「5時限の講義（2.73）」「先輩からの情報（2.73）」が挙げられた．一方，「科目名(2.27)」「教科書の購入の必要性（2.51）」「教科書の有無(2.53)」「シラバスの内容（2.63）」は影響が少ないという結果であった．科目の名称や教科書の有無について影響が少ないというのは予想されたことであるが，シラバスの内容が学生に与える影響が少ないというのは気になる点である．本学ではオリエンテーション時に，学生にシラバスの活用を指導しているが，あまり効を奏していないということになる．シラバスの内容充実など今後の検討課題である．学年間の差という観点では，「科目名」「科目を担当する教員」「教科書の有無」を除くすべての項目において２年生より1年生の方がポイントが高い．授業を選択する際，それだけ様々な要因を考慮して，慎重に選択しているという意識が伺えた．

3）教養教育を履修したことによって身についたこと（図4）

教養教育の履修によって身についたことについて平均点2.75以上の項目は，「教養的知識（平均点　2.76；以後同じ）」で，つづいて「他者の立場に立って考える力（2.57）」「表現力(2.57)」「情報を活用する力（2.57）」「価値観の多様性を知る(2.53)」「情報を集める力（2.53）」「情報を選択する力（2.53）」「受講態度（2.53）」が身についたと答えた学生が多かった．一方，「異文化との相互交流（2.04）」「我が国の文化や歴史（2.06）」「他国の文化や歴史（2.12）」はポイントが低く，あまり身についていないという意識が伺えた．文化や歴史，異文化との交流に関する教育内容の検討が今後の課題といえる．

4）満足度について　（表1）

教養教育の満足度については「とても満足」が0人，「やや満足(29名)」が29名（56.9%）であった．さらに「あまり満足していない（15名）」，「満足していない（3名）」と，満足度の低い学生が29.4%存在し，全体に満足度が高いとはいえない．また，学生の自由記述に，「資格が欲しくて大学に入ったので教養教育には興味がない」というものがあった．J学科は資格取得で授業や課外のピアノレッスンなどで過密であり，中には教養教育を負担に感じている学生がいるようである．前項の「身についたもの」のポイントの低さとも関連して，資格取得という目的に直結しない分野に興味を覚えないということであろう．今後，現在の教養教育が本学科の学生にとって有意義なものになるよう検討を加えるとともに，教養教育と専門科目との関連を説き，教養教育の有用性を理解させる必要がある．

3．K学部K学科

1）対象

対象者数は121名であった．そのうち回答者数は107名であり，回答率は88.4%であった．内訳は，1年生は47名中46名が回答し，回答率は97.9%，2年生は74名中61名が回答し，回答率は82.4%であり，2年生がやや回答率が低かった．

2）受講するときの影響要因（図5）

受講するときの影響要因について平均点が3点以上であった項目は，「試験の方法（平均点3.41；以後同じ）」「科目に興味関心がある（3.3）」「教員のすすめ（3.14）」「5時限の科目（3.11）」「教科書の購入の必要性（3.08）」「授業スタイル(3.04)」で，つづいて「単位が取りやすい(2.98)」「教員（2.93）「教科書の有無（2.88）」「空き時間ができる（2.81）」「1時限目の講義（2.80）」が挙げられた．一方，「科目名(2.53)」「シラバスの内容（2.62）」は受講するかどうかを決めるときに影響が少ない項目であった．「シラバスの内容」については，シラバスは本来，学生が科目選択する上で重要な情報であり，教育上重要な役割を担っているが，学生が科目選択する際に，十分に活用できて

いるとはいえない．教員からシラバスの重要性を伝え，日頃の授業の中で活用，学生が活用しやすい記載方法の工夫などが必要であると考える．また，「先輩からの情報（2.52）」は，K学科では，2年生は1期生ということもあり，情報が少なく，影響が少ないという結果となっているが，1年生は，2年生からの情報が多少の影響があることが伺えた．

3）教養教育を履修したことによって身についたこと（図6）

教養教育の履修によって身についたことについて平均点2.75以上の項目は，「他者に役立とうとする気持ち（平均点　3.07；以後同じ）」，「コミュニケーション能力（2.99）」「情報を選択する力（2.98）」「受講態度（2.98）」「情報を集める力（2.97）」「忍耐力（2.95）」「情報を活用する力（2.91）」「物事を論理的に考える力（2.91）」「価値観の多様性を知る(2.9)」「教養的知識（2.89）」「問題解決する力（2.88）」「倫理観（2.88）」「表現力(2.88)」「他者の立場に立って考える力（2.85）」「学習意欲（2.84）」「自己を確立する力（2.78）」であった．K学科では，これらの得点が，人間社会学部に比べて高い結果となったが，K学科では，入学後早期から専門教育を取り入れ，教養教育と同時進行する形で教育を行っており，早期の専門教育の影響と教養教育の相乗効果で，「コミュニケーション能力」や「他者の立場に立って考える力」など，看護をする上で重要な能力が身についていると考えられる．また，ここに挙げられた項目はどれも，この先専門教育を行っていく上で重要な項目であるが，看護職を目指すという明確な目標をもって入学した学生が大半であり，広い教養と専門知識の両方を求められる看護学という学問に対する姿勢の現れではないかと考えられる．一方，「我が国の文化や歴史（2.39）」「他国の文化や歴史（2.37）」「異文化との相互交流（2.37）」はあまり身についていない結果であった．文化や歴史，異文化との交流を身につけることができるような科目を強化していくことが必要であると考えられる．

4）満足度について　（表1）

教養教育の満足度については，1年生では，34名（73.9%）が「とても満足(3名)」，「やや満足(31名)」と回答したが，「あまり満足していない」と答えた学生も9名（19.6%）いた．「満足していない」と答えた学生は皆無であった．2年生では，52名（85.2%）が「とても満足(6名)」，「やや満足(46名)」と回答し，8名（13.1%）が「あまり満足していない（6名）」，「満足していない（2名）」と回答した．全体的にみるK学科においては，80.4%の学生が「満足」と回答しており，満足度は非常に高いといえる．このことは，先に述べたように，学生が専門職への明確な目標を持ち，それに向かう姿勢が大きく影響しており，同時に早期からの専門教育を取り入れながら教養教育を行うことの結果ではないだろうか．満足度の低い者も15.9%存在した．これらの学生が満足できるような教育上の工夫や取り組みが必要だと考える．

Ⅷ．まとめ

2学部3学科でのアンケート結果を検討した結果，以下のことが明らかになった．

1　受講するときの影響要因

選択科目を受講するときの影響が大きい項目としては，「試験の方法」，「科目に興味関心がある」，「時間帯」が各学科共通して影響が大きかった．一方，「シラバスの内容」は各学科とも影響が少ない項目であった．シラバスは本来，科目選択の際に大いに活用されるべきものであるが，本調査の結果から，学生が充分活用できているかどうかは疑問である．今後，シラバスの重要性をオリエンテーションなどの機会を利用して学生に周知するとともに，学生が充分に活用できるシラバスを教員側も考えていく必要がある．

2　教養教育を履修したことによって身についたこと

教養教育を履修したことによって身についた内容として，各学科共通して多かったのは，「教養的知識」，「情報を集める力」，「情報を選択する力」，「情報を活用する力」，「他者の立場に立って考える力」である．特に人と関わりを持つことの重要な本学の学科構成からは，「他者の立場に立って考える力」や情報活用の能力が身についたということは，喜ばしい点である．一方「我が国の文化や歴史」，「他国の文化や歴史」，「異文化との相互交流」は，J学科，K学科で低かった．これらの科目は，国際化という視点で考えたとき，教養教育上さらなる取り組みが必要だと考えられる．F学科ではこれらの科目が特に低い項目として挙げられなかったことは，留学生や長期履修生といった，幅広い学生が学ぶ学科としての特徴があらわれているではないだろうか．

3　満足度について(表3)

教養教育の満足度については，K学科では，80%を超える学生が「満足」「やや満足」と回答したが，F学科では，59.6%が「満足」「やや満足」と回答し，J学科では，「やや満足」が56.86%，「満足」は皆無であった．満足度に学科間で大きな差が出たのは，学生の教養教育に対する姿勢の違いや教養教育を専門教育の基礎的な位置づけとするか，基本的教養と位置づけて考えるかといった，教養教育に対する考え方の差などが反映していると推察でき，今後の課題といえよう．

今後学生の満足度を高めていくためには，教養教育として何を学ばせるのかを明確化し，大学全体のカリ

キュラムの見直しを含め，より発展的な改革が必要である．同時に，学生に対しても，専門教育の土台となる教養教育の大切さと両者の関連，社会人としての基本的教養を身につけることの大切さなどを理解させるような働きかけが必要であると考える．

おわりに

この度，U大学における教養教育充実に向けての活動の一環として，学生に対して教養教育の履修状況と教養教育によって学生が身につけている力についてアンケート調査を行い，その実態が明らかになった．学生は，教養教育を通じて目標とする専門的知識や資格取得のための基盤となる力を身につけている．今回の調査で教養教育に対する満足度が低い学生も認められ，今後初年次教育を含めた教養教育をより充実させていく過程で，学生の満足度をより高めていけるような質の高い教養教育を目指していかなければならない．

謝辞

アンケートにご協力いただきました学生の皆様に心より感謝申し上げます．

文献

1) 吉田文：教養教育と一般教育の矛盾と乖離：大綱化以降の学士課程カリキュラムの改革．高等教育ジャーナル－高等教育と生涯学 14，21-28，2006
2) 林正人：大学設置基準大綱化後の共通（教養）教育のかかえる問題．大阪工業大学紀要人文社会篇，48(2)，2003
3) 中央教育審議会大学分科会制度教育部会：学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）．2008
4) 中央教育審議会：新しい時代における教養教育の在り方について(答申)．2002
5) 絹川正吉：研究大学における教養教育．名古屋高等教育研究，第6号，171-194，2006
6) 大学審議会：グルーバル化時代に求められる高等教育のあり方について(審議の概要)2000.6

資料　　アンケートの質問項目

【あなたが選択科目を受講する場合、次のことはあなたにどの程度影響をおよぼしますか。】

(1)　時間割が１時限目の講義科目
(2)　時間割が５時限目の講義科目
(3)　空き時間ができる場合
(4)　単位が取りやすい場合
(5)　先輩からの情報
(6)　試験の方法
(7)　教員のすすめ
(8)　科目への興味・関心
(9)　科目名
(10)　シラバスの内容
(11)　授業のスタイル（講義か演習か）
(12)　教科書の有無
(13)　教科書の購入
(14)　科目を担当する教員

【あなたは、教養教育科目を履修したことで次のことが身についたと思いますか。】

(1)　行動力・積極性
(2)　主体性・自律性
(3)　教養的知識
(4)　他者の立場に立って考える力
(5)　我が国の文化や歴史の理解
(6)　他国の文化や歴史の理解
(7)　価値観の多様性を知ること
(8)　他者のとのコミュニケーション能力
(9)　物事を論理的に考える力
(10)　倫理観
(11)　表現力　（言葉づかいを含む）
(12)　他者のために役に立とうとする気持ち
(13)　必要な情報を集める力
(14)　情報を選択する力
(15)　情報を活用する力
(16)　問題を解決する力
(17)　異文化との相互交流の必要性
(18)　自己を確立する力（自分とは何かを考えること）
(19)　学習意欲
(20)　忍耐力
(21)　受講態度